九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 交野少将物語についての一試論

後藤，昭雄

https://doi.org/10.15017/12233

出版情報：語文研究. 25, pp.28-37, 1968-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

# 交野少将物語についての一試論

後藤昭雄

## 一

光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎おほかなるに、いとどかかるすきごとどもを、末の世にも聞きつたへて、かろびたる名をや流さむと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ、語りつたへけん、人の物言ひさがなさよ、さるはいといたく世をはばかりまめだち給ひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれ給ひけんかし。

交野の少将の名は、この「源氏物語」帚木巻冒頭の文章によって有名である。では、交野少将とは、どのような人物であるかといえば、「古物語『交野少将物語』の主人公で風流な好色人」というのが、現在の諸注釈書の大方の説明である。中で、島津久基氏、玉上琢弥氏には、現存の資料を駆使しての詳しい御考察がある。[注1]島津氏は、従来無批判にとりあつかわれてきた「交野少将物語」に関する資料を検討し、その同一性を明確にされ、玉上氏は物語の内容を復原する過程を通して、古物語の方法を鮮やかに分析された。私は両氏の御考説に教示を受けながら、新しい若干の資料を提出し、これらとは異った観点に立って考察してみたい。すなわち「交野少将物語」が実在の人物をめぐる事件をその構想の基盤とする物語であったことを述べようとするのである。

## 二

交野少将、あるいは交野物語の名が見えるのは、先の「源氏物語」帚木巻だけではない。断片的ながら、他にいくつかの資料がある。いずれも、島津、玉上両氏がすでに指摘されたところであるが、以下にそれらをあげ、交野少将とはどのような人物であり、その物語にはどのような話がもりこまれていたか、それを考えてみよう。

一(1)かたのの少将（和歌色葉集巻三）

(2)物語は住吉、うつぼ、殿うつり、（中略）、交野の少将

（枕草子三巻本、日本古典文学大系本二一二段）

二(1)吹きみだりたる萱につけ給へれば、人々交野の少将は、

紙のいろにこそととのへ侍りけれときこゆ
（源氏物語、野分）

(2)これは紫の薄様に書きて苅萱に附けたるが、紙の色に違ひたると、人々咎めたるなり、なみのしめゆふといふ物語によそへつつ見れどかひなしかくてのみひとりはいかがいでの山吹　ふりにたる事なれど紙の色に似たるこそをかしけれとて山吹に附け給ふ、かたのの少将にやなるらむ、今按に、交野少将は紙の色に似あひたる枝に附けたるを夕霧の心には必ずしも然るべからず、何にてもその時にしたかひたる花に附くべきと思ひ給へるにや
（花鳥餘情巻十五）

三(1)殿中納言たより（イたかゝり）のついてに一よとまりてまたともとひ侍らさりけれは身をなけんとしける所にてうかひをみつけてはかまのこしをひきやりてかゝりの松のすみしてかきてかの中納言につたへよとてとらせ侍りける
かたのの大領女
かつきゆるうき身の沫と成ぬとも誰かはとはん跡のしら浪
（風葉和歌集巻十四）

(2)ゆくゑもしらぬ大海のはらにこそおはしましにけめ
大海　日本紀ニ溟渤をおほうみとよめりはらとは大海うなはらと云儀歟、水原抄云かたのの物語に有可勘
（河海抄巻二十）

四(1)交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし
（枕草子、二九二段）

(2)まこと、此の世の中に恥づかしき物とおぼえ給へる弁の少将の君、世の人は交野の少将と申すめるを
（落窪物語巻一）

(3)交野の少将をかたちよしとほめ聞かせ奉りつるにこそ、見まうく成ぬれ、（中略）、文だに持て来そめなばかぎりぞかれはいとあやしき人の癖にて文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ、人の妻みかどの御めも持たるぞかし
（同）

(4)みやこのうちに、女といふ限りは、交野の少将めで惑はぬはなきこそうらやましけれ（同）

(5)物狂ほし、交野の少将のわたくしものまうけん時はしも、おほやけ〳〵しくてとられむ（同）

(6)彼語ら ひせし少納言、交野の少将の文もて来たるに
（同巻二）

一は巻名だけが記されるものであるが、これによれば「交野少将物語」と呼ばれていたことになる。ところで、三(1)「風葉和歌集」に「かたのの大領女」がよんだ歌を一首あげるが、これはこの集の詞書のかき方では、「かたの物語」の中で、大領の女がよんだ歌ということになる。また三(2)の「河海抄」所引の「水原抄」にも「かたのの物語」の名が見えている。この「交野（の）少将物語」と「かたの（の）物語」は同じものなのであろうか。これについて、島津、玉上両氏ともに前掲の資料を比較検討して、両者は同一のものであり、交野の少将がその主人公であるとされている。後に記すように、諸資料の間に一致した内容をもつもののあるところから、私もこれを妥当だと考え、以下、これに従って論を進めていく。

二(1)は、夕霧が明石姫君の御局で雲井雁への消息をかくところで、女房が紙と枝との色をそろえるという細かな心づかいをした交野少将を例にとって忠告したのである。(2)は(1)の本文に対する「花鳥餘情」の注であるが、ここに引用された「波のしめゆふ」という物語に見える交野の少将も「紙の色に似たるこそをかしけれとて山吹に附け」るという趣向をこらす人物であった。

三(1)「かたの物語」から「風葉和歌集」に引かれた一首であるが、本文の上で「たより」の個所が、京大本では「たかかり」となっている。これはあとに「一夜とまり」また「大領」の語がでてくるところから、「たかかり」に従うべきであろう。そして、これによって物語の内容の一部を窺い見ることができる。主人公殿中納言は鷹狩に行き、その地の大領の女と契りを結んだ、しかし再び訪ねてくることはなかったので、悲しんだ大領女は川に身を投げたという。(2)の「河海抄」は「源氏物語」蜻蛉巻の、失踪した浮舟をあるいは宇治川に水を投げたのではと侍女達が噂をするところで、「ゆくゑもしらぬ大海のはらにて」そおはしましにけめ」の源氏本文に対する注である。ここに「かたのの物語」の名が見えている。この物語にもやはり女の入水事件が描かれていたのであり、(1)と(2)とは同内容のものと考えられる。

四の「落窪物語」に見える交野少将は、古物語「交野少将物語」の主人公をさすのではなく、(2)の文に書かれているように「落窪物語」中の弁少将を人々が、交野少将と呼んだというのである。だから「落窪物語」の交野少将は直接には弁少将をさしているわけで、ここに描かれていることがそのまま、「交野少将物語」の主人公の交野少将の性格、行動と考えるわけにはいかない。しかし、両者はその人となりに共通するものをもつからこそ、弁少将は交野少将と呼ばれたのであろう。間接的には交野少将を知ることができよう。たとえば、(3)に描かれているように、交野少将は、「文だに持て来そめなばかぎりぞ、かれはいとあやしき人の癖にて文一くだりやりつるが　はづるるやうなければ」というような巧みな文の使い方をこころえている人であったが、これは前に二で述べた消息の紙と枝の色とをそろえるという細心の心遣いを見せる交野少将の描き方と符節を合する。とすれば(3)の「かたちよしとほめ」られ、(4)「京中の女」という女が「めで惑はぬはな」かったという交野少将の美貌、魅力は、ほぼ古物語の主人公、交野少将に備っていたものと考えてよかろう。

以上が現存の資料によって知られる「交野少将物語」の内容である。

## 三

交野少将について古来これにモデルとして実在人物を求める考え方があった。最も古くは「紫明抄」に「英明中将交野に一宿す」とあり、ついで「河海抄」に

一説云、業平朝臣たなばたつめにやどからんと詠せる時交野に一宿す仍有此名歟云々又英明中将を號交野少将云々(中略)

或説交野勝任というものありけりと云々

と諸説をあげ、「河海抄」の著者は「何も不足信用」と述べて

いる。また黒川春村の「古物語類字抄」に

按に尊卑分脈云、左大臣藤原武智麻呂公男、参議巨勢麻呂卿流、左少弁兵雄孫、左中弁千乗（按作者部類作千業）、季縄（右近少将従五位下、世号片野羽林名人鷹生）と見えたるは仁和頃の人なり、此人の事跡を作れる物語なるべし

とある。近くは、清水泰氏にこれら旧説に拠っての考説がある。[注2] 清水氏は旧説を検討し、結論として交野少将のモデルとして源英明を考えられる。旧説にいう他の業平、交野勝任、藤原季縄の三人については、清水氏はこれらを交野少将と考えるには、なお資料が不十分であるとしてしりぞけられた。私もこれらについては、氏の御考説に従い、ここでは氏のいわれる英明について考えてみる。

源英明についても、現存の資料によって、前節で述べたような交野少将らしき姿をさぐり出すことはできない。清水氏の論も積極的な資料に拠るものではなく、

英明は「号二毛車中将一」とも慈覚大師伝の奥書に見えている。（中略）毛車中将と呼ばれた以上は毛車を用いることが多かったことによると思われる。青、赤、紫などで飾った婦人乗用の毛車を用いたことは普通の男性とは少し異っている。江談抄につたえるごとく、時平一派の権勢に圧されて面白くなかった彼は、あるいは女色に欝を慰めるということがあったかも知れぬ。鷹狩に交野に行って、その時に婦人に関心があったかも知られぬ。そうしたことから毛車中将といわれ、交野少将といわれたかも知れぬ。そして交野少将物語はこの英明中将であったかも知れぬ。[注3]

と述べられるように推測の積み重ねによる結論である。さらに、そもそも推測の出発点となっている「毛車中将」の名は、氏が考えられたように英明が毛車を用いることが多かったことによるのではなく、次の「江談抄」（巻二）の話柄にもとずいている。

英明乗檳榔車事

又被命云、英明昔乗檳榔車被参法性寺御国忌。公卿多以参会朝成卿云、公卿之車外有檳榔車誰人哉。英明被答云、下官車也。若被咎仰者、不可乗檳榔車之由有所見者欲承云々。件法式無所見云々。

法性寺で御国忌のあった時、多くの公卿が参会したが、英明は檳榔毛の車に乗って加わった。公卿でないのに檳榔毛の車に乗っているのを不審に思った藤原朝成が車の主に声をかけた。すると英明は逆に、公卿でなければ檳榔毛の車に乗ることのできない所以を承ろうと応酬した。

このように旧説は、いずれも確固とした根拠にもとずくものでなく、推測されるそれらの人々の姿に「交野少将物語」の内容と重なりあうものを求めることはできない。

## 四

年返りぬ。桐壷の御方ちかづき給へるにより、正月朔日より御修法ふだんにせさせ給ふ。（源氏物語若菜上）

年が改った。光源氏は四十一歳である。六条院では御産の近まった明石女御のため、安産を祈る修法が始められた。葵上を出産で死亡させるという忌しい経験を持つ源氏をはじめ、身近の人

々はまだ若く弱々しい明石女御の身を案ずるが、女御は無事に男御子を出産する。

三月の十余日のほどにたひらかに生まれ給ぬ

この本文に対して、「紫明抄」は次のように注を加える。

東宮誕生事

御母明石中宮　六条院御女母明石上入道前播磨守女也

例　醍醐天皇誕生事

御母皇太后宮胤子　内大臣高藤公女母交野大領弥益女

これは東宮となる男御子を生んだ明石中宮の出自を説明し、このような幸い人の例を過去の史実に求めて例としてあげたものである。まことに的確な指摘というべきで、その系譜は酷似する。わかりやすくかき直せば次のようになる。

光源氏
└─明石中宮
　　└─東宮

入道前播磨守──明石上
　　└─今上帝

高藤
└─胤子
　　└─醍醐天皇

交野大領弥益──女
　　└─宇多天皇

「紫明抄」の指摘の史実としての正しさは、「尊卑分脈」「公卿補任」によって確かめ得る。

高藤──定国　母宮内大輔宮道弥益女従三引子（頭注）紀略、略記、西宮記裏書作列
　　└─定方　母同定国
　　└─胤子　母同醍醐天皇御母儀宇多天皇女御

（尊卑分脈）

昌泰二年条

藤原定国　母宮内大輔宮道弥益女

（公卿補任）

「紫明抄」にいう「交野大領弥益」は、宮道弥益である。

注目されるのは「紫明抄」に見える「交野大領弥益女」の文字である。すなわち、さきにあげた「風葉集」中の一首の作者「かたのの大領女」と近似し、両者の間に何らかの結びつきが予想される。これを端緒として糸を手繰って行けば、「交野少将物語」の未知の部分を知り得るのではなかろうか。これら二つを結び合わせると、一応次のような推測を下すことができる。

この「かたのの大領女」は「交野大領弥益女」、つまり、宮道弥益女である。とすれば、その宮道弥益女を妻とした藤原高藤が、「かたのの大領女」と一夜だけの契りを交した殿中納言ではなかろうか。さらには藤原高藤が交野少将ではなかろうか。

ここにいたって藤原高藤が浮び上ってくる。高藤の恋―。我々が想い起すのは、彼の少年の日の冒険行である。最も詳しくは「今昔物語」巻二十二第七話、高藤内大臣語として見える。長文なので筋を要約すれば、次のような話である。

良門の子高藤は、父に似て鷹狩が好きであった。十五、六歳の頃、鷹狩の途中、南山階の渚の山で驟雨にあい、雨を避けて一軒の家に立ち寄った。そこで主人のもてなしをうけて一晩を過したが、その時、その家の少女と契りを交した。

この事があってから高藤は、父から鷹狩に出ることを固く止められたが、少女の面影はいつまでも忘られなかった。六

年たって父の亡くなった後高藤は案内を知った舎人一人をつれて再びかの家を訪れた。少女は見違るばかり美しく成長しており、可愛い五、六歳の女の子をつれて彼の前に現れた。それが自分の子であることを知った高藤は、奇縁に驚くと共に強く女に惹かれ、母子共に自分の邸に引き取ることとした。その家の主を尋ねると、その郡の大領宮道弥益という者だった。のち、女の子は成長して宇多天皇の女御となって醍醐天皇を生み、続いて高藤と弥益女との間に生まれた二人の男子、定国、定方は大将、大臣となり、高藤自身も内大臣にまで進んだ。また、弥益夫妻は、それぞれ、勧修寺大宅寺を開き、一門共に栄えた。

古典大系本の頭注によれば、他に「中外抄」「富家語」「勧修寺雑事記」「勧修寺縁起」「宇治大納言物語」にも類話があり、当時広く世間に伝えられていたと思われる。

この高藤の冒険譚の初めの部分の主要な筋、すなわち、鷹狩に出て雨に遭い、雨宿りをした家の女と一夜だけの契りを結び、その後、長い間訪れなかったという点は、まさに「風葉集」の「殿中納言たかがりのついでに一よとまりてまたとひ待らざりければ」と符節を合する。

そして、いま「交野少将」と「かたのの大領女」を、藤原高藤と宮道弥益女とする立場で考える時、玉上琢弥氏の交野少将物語についての結論をも満足させるように思われる。玉上氏は次のように述べられた。

こうして最後の考え方に到達する。「交野少将物語」は短編であった。この人と大領の女との事件を主とする物語であった。そして、他に交野の少将を語る物語があったのではなく、この人の世のすき人たることは説明されているだけで、恋人とのことは、必ずしも一々には、描かれてはいなかったのである。この人の恋愛生活から見ればほんの挿話にすぎず、傍流にすぎない大領の女とのことが、前面に描かれていた。「都の中に女といふかぎり」「めでまどはぬなき」交野の少将が、それらに対しては熱中せず、なんと、大領の女ごときをあいてにしたのである。下の品の女を問題にした人として、前に交野の少将あり、後に光る源氏の君あり、と、「源氏物語」の作者の引用するゆえんであり、[注4]（以下略）

従八位相当の郡の長官にすぎない大領宮道弥益女を相手にした藤原高藤は、まさに「下の品の女を問題にした人」なのだからである。

このように考えてくると、「交野少将物語」は、高藤がまだ少将であった少年の頃の鷹狩に出かけた交野の地の大領の女との恋物語を描いたものではなかったのか。だから、その恋の舞台となった交野の地名をもって、交野少将と呼ばれ、物語の名ともなったのではなかろうか。という考えに達する。

散佚物語の中に、このような伝説物語、実録物語と呼ぶべき系列の作品が他にもあった。共に「和歌色葉集」「八雲御抄」にその名が見える「硯破」「山蔭中納言」は、「今昔物語」（巻十九）に見える小一条左大臣師尹の若君、および中納言藤原山蔭に関する物語であったと考えられる。[注5]

ところが、以上の推論を妨げるいくつかの障害がある。

一つは高藤の官位と年令の関係である。前に高藤が少将であ

った少年の頃と述べた。しかし、実際の高藤の官歴を見ると、元慶七年正月十一日に左近少将に任官しているが、時にすでに四十六歳である。高藤は後には、内大臣に任ぜられ、太政大臣を追贈されているが、これは女胤子の生んだ皇子が即位して醍醐天皇となってからの事であり、北家ではあっても傍流となった良門の子であった彼は、後代の摂関家の子弟のように、若年にして高位高官にあったのではなかった。こころみに、十五、六才の頃の官位を求めようとしても史料に記されてすらいない。ともかくも、「今昔物語」にいう十五、六歳とは大きな逕庭がある。しかし、これは物語における虚構化と考えれば説明できる。

恋物語の主人公にふさわしい境遇を考えれば、四十歳を越えた老齢の少将であってはいけない。どうしても紅顔の貴公子でなければならない。そして、人々に顕門の貴公子としてのイメージを与える年齢の頃は、地位としては少将がふさわしい。物語には年若き恋の主人公として、しばしば少将が登場する。「落窪物語」の右近少将、「堤中納言物語」「思はぬ方にとまりする少将」の、故大納言の二人の姫君のもとに通う右大将の子の少将と、右大臣の子の権少将、「花桜をる少将」「貝あはせ」の蔵人少将がある。散佚物語にも「ふせごの少将の物語」「あやめかたひく権少将の物語」があるが、その内容について、松尾聡氏は、それぞれ「少将といふすき者の若い貴族の忍び歩きの逸話を中心とした物語といった風のものであったろう。」また「権少将は勿論この物語の主人公であろうが、その地位から考えて、恐らく年若い秀麗な貴公子であろう。」と述べられている。[注7] 史実の上でも、「前少将」「後少将」と並び称され、その美貌をうたわれた藤原挙賢、義孝の兄弟がある。良岑宗貞は「大和物語」では「良少将」と呼ばれ、「いと色好みになむありける」と性格づけられている（一六八段）。また、「今の左の大臣」実頼が式部卿の宮に仕える大和と歌をよみかわしたのは「少将に物したまうける時」であった（一七一段）。要するに、「宇治拾遺物語」二六話に蔵人少将を紹介して、「まだわかく花やかなる人の、みめまことに清げにて」という文章が、当時一般の少将に対していだくイメージを代表するものといえよう。

二に「風葉集」後半部と、高藤物語後半部との内容の不一致である。「風葉集」によれば、「かたのの大領女」は殿中納言をひたすらに思い、そのために川に身を投げる。これは「水原抄」に引く「かたの物語」にも見えることは先に述べた通りであり、二つの資料に共通してあらわれることは、これがこの物語のやま場の一つであったことを思わせる。ところが、一方「今昔物語」では、大領女は彼女を忘れられずに再び訪れた高藤の妻となり、二人の間に生まれた女の子は、のち入内して、ついには国母となる。かれは悲恋のヒロインであり、これはこの上なき「幸ひ人」である。

第三の、そして最も大きな障害は物語の舞台である。それは交野でなければならない。交野は河内国にあって山城の嵯峨野などとともに、古来狩場として有名な地である。桓武天皇の遊猟の記事など「日本後紀」に散見する。その交野郡の大領が宮道弥益で、その交野大領女との恋を描いたものであってこそ、「交野少将物語」と名付け得る。ところが「今昔物語」では、

高藤が鷹狩に出たのは、「南山階ト云フ所渚ノ山ノ程」である。すなわち山城国宇治郡に属する。なお鷹狩の場所についての記述がここだけなら、あるいは「伊勢物語」八十二段の惟喬親王が鷹狩を行った場所の名である交野の渚の家との混同として説明することができるかもしれないが、後日談として「其ノ弥益ガ家ヲバ寺ニ成シテ、今ノ勧修寺此也」という。勧修寺は、現在も京都東山区にあり、高藤系はのち勧修寺流を称するのであるから、これを他との混同と説明しようとしてもいかんともしがたい。やはり、鷹狩の場所は南山階としなければならない。[注8]とすると、宮道弥益は宇治郡の大領だったのであり、物語の舞台は交野ではなく宇治だったのである。高藤が交野少将と呼ばれ、物語が「交野少将物語」と呼ばれる根拠は全くなってしまう。

## 五

正応三年（一二九〇）に作られた「賦源氏物語詩」の序は次のようなものである。

夫光源氏物語者、本朝神秘書也。浅見寡聞之者、以レ之為二遊戯之弄一。深思好学之者、以レ之為二惇誨之基一。戴二神代之事一、述二人代之事一。熟二與舎人親王之華篇一。惣二百家之書一、編二一家之書一。其奈司馬子長之實録。誰謂花鳥之媒。即通二和漢之籍一。此物語之為レ体也。仁主四代之継二天祚焉一。鴻霈徳遍。三公百僚之仰二風化一矣。鱗水契深。或入二深宮之華帳一、今結二密契一。模三在原中将之耽一艶色一。（或いは深宮の華帳に入りて密契を結ぶ。在原の中将の艶色に耽るに模う。）或出二散地之松戸一、今為二好逑一。如三交野少女顕栄昌一。（或いは散地の松戸を出でて好逑となる。交野の少女の栄昌を顕はせしが如し。）（以下略）

ここにいう「交野少女」は、「交野」の文字の一致によって「交野少将物語」に結びつくものではなかろうか。考察を加えてみよう。

この文章は序として駢儷文の形式をもっている。そこで対偶をなす文をにらみ合わせて考えていかなければならない。

奥深い宮殿の華やかな几帳の下に忍び入り、秘められた契りを結ぶ。このような男の行為は業平の中将の好色の模倣であり、閑散なる家の松の板戸の下より出でて、貴公子のよき伴侶となる。このような女の境遇は交野少女の幸運の再現である。ともに「源氏物語」における男女それぞれの行動を、先蹤の、人物と比較していう。今、この詩序の作者は、「源氏物語」の中のいかなる人物の、どのような行為、境遇を、在原中将に模い、交野少女の如しというのであろうか。

まず、前者について考えれば、「源氏物語」には女のもとに忍び入り、秘められた契りを交すという場面は多い。しかし、ここではそれが「深宮」であることによって自ら限定される。人里はなれた賤家ではない。九重の門にとざされた御局である。このような条件のもとに「源氏物語」に目を注ぐと、思い至るのは、光源氏と藤壺との宿命的な恋である。そして、このような王妃との密事という主題を、業平に求めて「伊勢物語」を考えれば、業平と二条后高子との密事がある。この両者は「帝の御妻をあやまつ」物語であり、この点において構想上につながりをもつ、このような見方は、この鎌倉期の詩序の作者だけでなく現代の研究においても説かれるところである。[注9]

後者はどのように解釈できるであろうか。「散地の松の戸を出でて好逑と為り」「栄昌を顕した」と呼べる人は、数多い「源氏物語」に登場する女性の中にも一人しかいない。「口惜しき山賤」と自嘲する播磨守明石入道の女に生まれて、光源氏に迎えられ、ついには国母の母となる明石上である。この彼女の栄進ぶりが「交野少女の如し」というのである。とすれば、「交野少女」も下賤の身に生まれて、貴紳の妻となり、その子が后となり国母とあがめられる「幸ひ人」であったに違いない。このような例が「源氏物語」以前にあったであろうか。それは前にあげた「紫明抄」の指摘にたちかえればよい。宮道弥益女があったはずである。二人の境遇の酷似することは先に見たとおりである。この見解もまた現在の研究によっても支持される。石川徹氏は次のように述べられる。

この話（明石上物語―筆者注）は、中流貴族の女の上流への進出といふ事が主題だといふ点で、やはり伝統的な「女の幸運」型の物語で、元来「高藤伝説」を踏まへてゐると思ふから、一層原初的なものであったらう。それで、新婚時代に原本的なものが書かれたのだと思はれる。なぜなら、高藤は、紫式部の家族（父系）から、男系だけでも遡れるし、女系を見ると、高藤の子定方の娘が為時の母である。また高藤は宣孝の四代の祖でもある。旁々自分と夫と両方の祖先である高藤北の方、宮道弥益女（定方の母）の出世譚を何らかの形で書きたかったのであろうと思われる。[注10]

ここで、明石上を媒介として、「交野少女」と弥益女とのつながりが考えられてくる。では交野少女がすなわち弥益女であると言ってよいのであろうか。その前に考えておくべきことがある。

それは交野少女の性格である。交野少女は物語という虚構の網を通して見る実在の人物であるに違いない。それは「在原中将」と対偶をなしているからである。そもそも駢儷文中の対偶は均等な形、比重で対比される。在原中将は、元慶四年五月廿八日、五十六歳で卒した従四位上行右近衛権中将兼美濃権守在原朝臣業平であって、その「深宮の華帳に入って密契を結ぶ」という行為は、「伊勢物語」におけるすき者としての「ある男」の性格にもとずく。同じように、交野少女も史実上実在した女であり、また物語の中にも登場せねばならない。換言すれば、この「交野少女」の登場する物語は、全く作者の頭の中で創り出されたものではなく、多分に虚構の筆が加えられているにせよ、史実上の人物をその基底においてモデルとするものであった。とすれば、「交野少女」という呼び名も「交野物語」の女主人公であったからそう呼ばれたのではなかろうか。そして、詩序の作られた鎌倉末期、物語における交野少女の名は、「伊勢物語」における在原中将と、文字通り並び称されるほどに読者に知られていたに違いない。このように考えてくれば、「交野物語」は「交野少将物語」であり、その女主人公が「交野少女」であったと考えてよいであろう。

以上のように「交野少女」という文字からは、「交野少将物語」との同一性が、彼女の境遇からは宮道弥益女であることの可能性が考えられる。これは前節で考えた交野少将高藤説を強力に支持するものである。しかし、「交野少女」が弥益女であ

ることは考えられても、それがそのまま「風葉集」の「かたのの大領女」とはならない。「交野少女」は弥益女とともに「幸ひ人」ではあっても、恋のために川に身を投げる悲劇の女ではないのである。「交野少将物語」を高藤物語であるとする立場に立って初めて「交野少女」は「かたのの大領女」となる。しかし、前節で述べたように、そのように断言するにはなお躊躇されるからである。

## 六

これまで述べてきたように、「紫明抄」「賦源氏物語詩序」の新資料は、互にあいまって、交野少将高藤説を成立させ得るように思われる。その中で障害となるいくつかの要素が考えられるが、なおその蓋然性は非常に高いと言ってよかろう。その説の成立を妨げる要素も説明できないわけではない。悲恋の「かたのの大領女」と、「幸ひ人」の弥益女、あるいは「交野少女」との齟齬も、身を投げはしたものの助けられ、最後はハッピーエンドに終る。「風葉集」には物語のやま場の一つとして採られたのだと考え、交野と宇治の地名の相違も、「たかかりのついて」が物語の発展の要素であるところから、物語化される段階で、鷹狩の場所としてより有名であった交野とされたと考える、と説明することもできよう。しかし、このように恣意に話のつじつまを合わせようとすることは、物語という虚構―それも散佚した―を考察の対象とすることに甘えたことになるであろう。なお、やはり蓋然性は高いという段階に止めておかなければならない。一試論と題するゆえんである。

注

1 島津久基「対訳源氏物語講話」帚木　玉上琢弥「昔物語の構成」（「源氏物語研究」所収）
2 「日本文学論考」第一篇第二章
3 前掲書五二ページ
4 前掲書一三三ページ
5 至文堂「日本文学史」中古・散佚物語項（寺本直彦執筆）
6 公卿補任・寛平六年条藤原高藤尻付
7 「平安時代物語の研究」
8 宮道弥益についての記事が「三代実録」に三個所見える（元慶元・正・三―従五位下漏刻博士、同六・正・七―従五位上主計頭兼越後介、仁和三・二・二―主計頭兼伊予権介）が、某郡の大領であったとの記述はない。
9 石川徹、「伊勢物語の発展としての源氏物語の主想」（「古代小説史稿」所収）
10 「紫式部の人生経験と源氏物語との関係」（「国語と国文学」昭和三十八年十月号）二一ページ